

## 授業方法について独自に工夫していること 【教育科学系】

・資料や動画での映像なども多く活用し、見て理解しやすいように。

テキストの内容をすべて扱うことが時間的に無理であることから、学生にとって有意義と思われる箇所限定して授業を行っている。また、映画の内容を耳からだけの英語で理解することは困難であると思われることから、英語字幕付きと日本語字幕付きで2回視聴させている。

すべての授業でアクティブ・ラーニング型を行っている。  
対話型を重視し、一方的ではない課題をグループで解決している。  
すべての授業資料や提出物等を、「まなびネット」を使用してやり取りしている。

・ある事例について、学生同士、ディスカッションする機会を作り、それを発表する。  
・実践活動を通して体験することにより、調査活動をしたり、仲間とコミュニケーションをとったり、仲間とつながりを感じたりなど、自分なりに実感することを大切にする。  
・DVD視聴より、現場の子どもたちの様子を知り、教師としての心持ち、子ども理解、指導に役立てていく。など。

・最新の医療情報を収集し、常に新しい情報を取り入れた授業内容になるように工夫しました。  
特に厚生労働統計協会が毎年8月末に発行している「国民衛生の動向」の統計資料等に基づき、最新の情報を学生に提示しつつ、さらに小児保健の領域に関する資料を配布して説明し、より小児保健に対する理解を深められるように配慮しました。  
・学生の気づきを互いの学びにするため、グループ討議の時間を設け、「なぜそう考えたのか」を発表する機会を頻回設定しました。

講義内容に対する視覚的な理解を補完するために、類似した内容を扱っているDVDを講義の直後に視聴している。授業内で実施する小レポート内でも、これにより講義内容の具体的な理解と視野の広がりが促進されるという感想が散見される。  
また、保育者として必要とされる幼児理解・保護者理解・同僚理解能力を育成することを重視している。そのために不可欠な想像力を伸長させるため、また、価値の多様性についての実感的理解を促すために、事例検討の際には必ずグループ討議を実施し、様々な考え方を知る機会とすることにも重点を置いている。

時間内に仮説を考え、パソコンを持参させて、自分でデータ処理を行うことができるように配慮している。レポートについて仮提出させ、ピア評価を取り入れている。最終的に一人ひとりのレポートを添削・返却して参考にさせている。

実例がわかるように、時間に余裕があればDVDや画像を組み込んだ授業になるよう心がけている。

・最近の学生は新聞を読まず、SNSのニュース中心に情報を得ているため、幅広い知識を付けるために新聞記事を活用する。  
・課題(最小限の情報)を与え、小人数でまず学生同士で話し合いをさせ、発表させ、それを踏まえた解説や講義を行う。  
・最新の各種データを資料として使用し、状況が分析できるように説明する。  
・自由に質問しやすい雰囲気を作る。  
・コメントシートに書かれた内容を、丁寧にフィードバックする。

- ・視聴覚教材を短時間利用している。
- ・黒板をていねいに板書して、まとめている。

反転授業、アクティブラーニングの手法を主として行った。  
毎週、テキスト1章分を各自読み(下線を引き、辞書を引きながら)、担当部分についてmindmapを作成する。  
授業ではmindmapを発表し、グループ内で互いに評価する。  
テキストの内容に関する確認問題を解き、1グループ1問の回答を黒板に書く。  
その回答に対して、教員が補足・解説を行うという授業であった。

- ・幼児教育の具体的なイメージを持てるようにするために、DVDを活用した。
- ・学生同士意見を交換し合う場を多くとり、考えが広がるようにした。

- ・保育現場で役に立つように、実践的な授業内容を心がけた
- ・幼児の表現について、具体的な事例とともに授業内容を関連づけるよう心がけた

幼児教育や保育の現場で活かすことができる内容を扱うように心掛けています。  
本授業の中で、将来学生たちが出会う子どもたちにとっても楽しむことができる内容を扱うことによって、子どもたちのことを意識しながら学ぶことができるようにと思いながら授業を行っています。

今年度初めて開設した教科であったので、従来担当してきた科目を参考にしながら、試行錯誤をした状態にある。次年度は内容を精査し、実技に加えて理論的な学びや思考的な学びの場をもう少し増やしたい。  
この科目は1年生なので、科目の専門的な内容以外に「全員の間で話すことに慣れる」ことも1つの目標である。従って、26名という多人数でありながら、一人一人が全員の前で2回ずつ保育者役を経験できる機会を設定し、最後3回目は一人ずつ「パネルシアター」を製作し演じるように工夫した。そして、絶えず各学生の良さをみんなの前で具体的に指摘し、自信を持てるようにするとともに、一人一人の良さが全員に伝播するように工夫した。

いずれの授業科目において、学生が主体となって授業に参加し、授業内容の理解を深めることができるようにしている。特に実習科目では、グループで協働して学び合うことによって、実践的な学びへとつなげるようにしている。

障害者に関わる法制度は複雑であり理解しにくい部分も多いため、具体的に障害者の生活がイメージでき、法制度がどのように生活に影響を与えているのかを理解できるよう、障害当事者にゲストスピーカーとしてお話ししていただいたり、映像資料を活用するなどして学生が障害者の生活を身近に感じられる工夫している。また、資料は複雑な法制度を可能な限り理解しやすいよう工夫して作成している。

幼稚園教育要領、教科書を用いて、自分で学べるように指導する。  
国立教育大学附属幼稚園の実践資料をネット上で示し、自分で学べるように指導する。

授業内にアクティブラーニングを取り入れ実体験による学びを得られるようにしている。

学生の主体的な発言を重視したグループワークショップを毎回取り入れてきた。  
保育実践の中で使用可能な教材の紹介をできるだけ多く心掛けた。

話をよく聞きとること、授業ノートを仕上げることを求めたことです。

基本的にパワーポイントと教科書を参照しながらすすめているが、将来保育者を目指す学生たちなので、自分やクラスメイトと相談しながらまとめ、紙にわかりやすく示す、ということも大切にしている。  
たとえば、園で発行する“おたより”を念頭において、ポスターにまとめる時も、手書きであることを重視し、内容と合わせて、イラスト、写真、レイアウトを工夫するように指導している。

講義の中で心の病気や心の障害について取り扱うが、それらをいかにわかり易く、想像できるように伝えられるかという点に重きを置いて講義を行った。具体的には以下のような点を工夫した。

- ①多様な精神病理学的症状については、病態水準という切り口から整理し、映像を通して伝えるように努めた。
- ②健康と思われる心の状態から、段々と不健康、不適応的になっていくプロセスを表現した映画を見てもらい、講義の中で詳細な説明を加えることによって「病んでいく心」について、じっくり考えることを重視した授業展開を考えた。
- ③心の病気や不適応という心のあり様を捉える心理学的アセスメントについては、単に講義するというより、実際の心理検査の一部を体験してもらい、心のアセスメント(査定)について考えられるように進めた。

出席レポートを数回にわけて実施することで、学生が関心をもっている内容や知りたい情報を教員に質問できるような機会をもつように心がけ、その内容をもとにそれ以降の授業で還元できるようにしていた。

ワークを多く取り入れ、学生同士でシェアする時間を設けた。  
毎回、授業感想シートを提出してもらい、質問等についてコメントをして返却することで、学生とのコミュニケーションをとった。

実践応用的な講義なので、自験例を基にした事例を多く提示し、さらにその事例を経験している中で実際に考えたことや感じたことなどを加えて、臨床現場のリアルな感じが伝わるように話した。  
事例検討やチーム医療のグループワークでは、臨床実践に近い例を提示して、各個人が自分ならばどう考えるのかについて小グループに分けて自分自身の意見を話すように工夫した。また、各グループでの討議の内容を全体で共有する時間も設け、様々な意見を聞けるようにした。

当該科目は社会福祉士の資格試験における選択科目のひとつであり、①社会福祉サービスに関する相談援助活動と法との関わり、②相談援助活動において必要となる成年後見制度の仕組みと制度運用の実際、および、③社会的排除や虐待などの権利侵害を受けている人々や認知症等により日常生活上の支援が必要な人々に対する権利擁護活動の実際に関する基本的知識を身につけることを目標とするため、講義内容はかなり広範かつ大量である。そこで、テキストの記述を前提とした「講義メモ」を作成・配布し予習・復習を奨励している。

文部科学省やその他の調査機関の資料を自身の経験からの視点を加え、理解しやすい説明に注力している。また、パワーポイントのスクリーン資料と板書の併用で説明を深めている。

Active debateを盛り込み、生徒参加型を意識しました。

身近な制度ではあるが、難しく考えられがちであるため、各回のテーマやねらいを明確にすることを意識している。